

認めない平下

P N タイガー

ある日の朝、平下が異常なほど汗をかいていた。

「おい、お前汗やべえぞ」

と言うと、いや、そういうのいいから。と認めようとしな。

「いや、誰がどう見ても汗が尋常じゃないって」

「まじだるいって、いいから」

そう言う、平下はトイレに行ってしまった。

平下は自分が嫌なことはなんとしても認めない所があり、僕はそれをなんとしても認めさせたいと思っている。

そして次の日、今度は前髪が変だったので

「今日は前髪の形エグいぞ」

と言うと、また。

「だからいいって。どうせ嘘やろ」

「いやマジだつて」

「はいはい」

というように、また平下は僕の指摘を認めなかった。

どうしたら平下は認めるのだろう。僕は考え、証拠を出しつつ話したらいいと思いついた。

そしてまたある朝。その日は僕が漢字の間違いを指摘して、平下が認めないということがあった。今だ！僕は心の中でそう叫び、漢字の答えを出しながら自分の方が正しいと主張した。決まったな。僕は内心ガツポーズを取りつつ、平下に向けてドヤ顔をした。もし相手が僕なら軽いパンチをお見舞いしていただろう。

「ほら、こっちの方があってたやん」

そう言う、なんと平下は

「いや、分かってたけどあえて復習のために間違えてたんよ」

と言ったのである。さすがに嘘だと分かり、粘り強く続ける。

「そんなわけないやろ。認めろって！」

「だからあえて間違えてやったんだつて」

そんなやりとりが何回もあり、ついに平下は自分の非を認めた。

「分かった。認めてやる」

なぜか偉そうな口調ではあったが、平下を認めさせたのにはかわりない。僕は勝利の余韻に浸りながら一限目を受けるのであった。

昼休みになった時、平下が言った。

「その歩き方きもくない？」

さては、さっきの仕返しか？ 僕はそう思い逆に論破してやろうと思った。

「歩き方なんて僕の自由だし別によくね」

言い返そうとする平下だったが、あきらめたのか「ああ、そうだな」と言っただけであっさり終わった。

僕は勝利した。あのひねくれた論破のひろゆきみたいなやつに。僕は満足し、もう平下が認めないことがあっても平気になっていた。

しかし、また平下がお前寝癖やばいよ。と言ってきたのであしらうように「嘘いいって」と言うと、タブレットの画面を見せてきた。

「ほら、寝癖じゃん。認めろよ」

「お前、もしかして仕返しか」

「そんなことはいいから認めろよ」

そんな平下の執念には呆れつつ僕は言った。

「認めるよ」

そう言うと、満足したような顔をして自分の席に戻っていった。

いいだろう。次はお前の番だ。絶対にまた認めさせてやる！ 僕たちの戦いは終わらない。